

[[時間は資源である]] としても、それは概念譬喩の結果だとは限らない

黒田 航 井佐原 均

(独) 情報通信研究機構 けいはんな情報通信融合研究センター

1 はじめに

この論文は Lakoff らによって提唱された**概念譬喩理論** (Conceptual Metaphor Theory: CMT) [12, 13, 14, 15] の記述的妥当性を問題にする¹。具体的には [[TIME IS A RESOURCE]] = [[時間は資源である]] という概念譬喩 [15, pp. 161–169] を取り上げ、CMT の概念譬喩の認定が自家撞着的なものでないかを検討する (本稿では “ T is (a) S ” = “ T は S である” (S, T はおのおの元領域, 先領域) という特徴づけが概念譬喩であることを明示するのに [[T IS (A) S]] = [[T は S である]] という表記を用いる)。特に問題とするのは、CMT での概念譬喩の認定条件の自己成就性である。概念譬喩 M = [[T IS AS]] によるデータ D の説明は、 D を説明するのに十分 (すぎるほど) に強力であるが、 M を仮定する必然性 — M より弱い仮説では D が説明できないこと — が示されていない。これにより研究者の確証バイアスが助長され、CMT が反証不能な理論となる恐れがあることを私たちは示唆したい²。

この種の問題を解消する必要から、私たちは言語データから概念譬喩を実証的に発見するための手順 (§2.6.1)、並びに、概念譬喩を認定するための実証的基準を提唱し (§2.7.4) footnote 私たちのものと同一ではないが、関連の深い概念譬喩の実証的認定法の提案として [27, 28] も参照されたい。、実証的データ解析の結果として、私たちは次のことを主張する：

- (i) [[TIME IS MONEY]] は (CMT で主張される S, T の間の非対称性が必ずしも成立しないなどの限定つきで) 有意な記述的一般化だと言えるが、[[TIME IS A RESOURCE]] による関連データの説明は実証的には必然的でない過剰一般化である。
- (ii) CMT が [[TIME IS A RESOURCE]] で説明しているデータは、何らかの概念譬喩の結果というより、譬喩写像以外の原因によって生じる**自発的な概念拡張**の結果であると考えの方が理に適っている。

これらに基づいて、私たちは次のことを示唆する：

- (iii) CMT は反証不能なほど強力に「空虚」な理論であるか、反証可能だが自明な内容しか主張しない、「些細」な理論かのいずれかでしかない。
- (iv) CMT の概念譬喩の認定が杜撰である限り、それは不可避免的に過剰一般化をもたらす不良理論である。

2 [[TIME IS MONEY]] と [[TIME IS A RESOURCE]] は両方とも概念譬喩か？

2.1 CMT の主張

Lakoff と Johnson [15, pp. 161–169] では、太字体の語句の語法の説明に [[TIME IS A RESOURCE]] が使われている。

- (1) **1. You have some time left; 2. You've used up all your time; 3. I've got plenty of time to do that; 4. I don't have enough time to do that; 5. That took three hours; 6. He wasted an hour of my time; 7. This shortcut will save you time; 8. It isn't worth two weeks to do that; 9. Time ran out; 10. He uses his time efficiently; 11. I need more time; 12. I can't spare time for that; 13. You've given a lot of time of your time; 14. I hope I haven't too much of your time; 15. Thank you for your time.**

Lakoff らの与える定義は (2) である。

- (2) “The Time Is A Resource Metaphor is a mapping that applies to a conceptual schema that characterizes what a resource is” (p. 161)

以下で問題にするのは次の点である：

- (3) Lakoff らがのおの [[TIME IS MONEY]] と [[TIME IS A RESOURCE]] と呼んでいる二つの譬喩は、本当に両方とも概念譬喩なのか？
- (4) 特に後者が非譬喩的な**ぞんざいな下位クラス化** (loose classification) ではなく、(資源) スキーマの単なる**具現化**でない、正真正銘の概念譬喩であるとする証拠は充分かどうか

2.2 概念譬喩写像理論の (誤った) 予測

概念譬喩がヒトの思考パターンを決定するほど強力なものであるという強い解釈の下では、[[時間はお金である]] ([[TIME IS MONEY]] の日本語版) という概念譬喩に関する CMT の理論的予測は、

- (5) もし [[時間はお金である]] という概念譬喩が妥当な一般化であるならば、 X という項が [[お金]] であることを許容する動詞 (e.g., “かかる”, “費やす”, “支払う”) は例外なく X が [[時間]] であることも許容する

ということである。「概念譬喩がヒトの思考パターンに関係している」という弱い解釈では、このような予測は成立しないが、その代わり、CMT 自身はそれほど興味のある言語と思考の説明モデルではない。CMT 自身が Lakoff らが主張するほど強力に、興味ある言語と思考の説明モデルであるためには (5) の一般化が成立することが不可欠である。

このような背景の下で、私たちは (5) の一般化が正しいかどうかを以下の (6)–(9) に挙げた動詞ごとに確かめてみた：

- (6) [[支出]] に関する表現
 - a. Y に X がかかる
 - b. Z が Y に X をかける
 - c. Z が Y に X を払う
 - d. Z が Y に X を支払う
 - e. Z が Y に X をさく
 - f. Z が Y に X を費やす

(7) 〔損得〕に関する表現

- a. ZがXをもうける
- b. ZがXをかせぐ
- c. ZがYでXを得する
- d. ZがYでX得する
- e. ZがYでXを損する
- f. ZがYでX損する
- g. ZがYでXを失う
- h. ZがYでX失う

(8) 〔省力化〕に関する表現

- a. (Zが)Y((する)に)Xを省く

(9) 〔必要性〕に関する表現

- a. (Zが)Y((する)に)はXが必要
- b. (Zが)Y((する)に)はXが要る
- c. (Zが)Y((する)に)はXを要する

以上の例で、(10)のおのおのの要素について、それがXの値となった文に対しY,Zに適当な語句を補うことができるかどうかを尋ね、その難易度を評定してもらった。Xの変域は以下の通りであった:

- (10) a. **お金, 三千元** (〔お金〕クラス)
- b. **時間, 三日** (〔時間〕クラス)
- c. **暇** (〔時間〕クラス?)
- d. **労力, 手間** (〔労力〕クラス); **手間暇**
- e. **注意, 忍耐, 我慢, 能力, 人気, 資格** (〔能力〕クラス)
- f. **子供** (〔子宝〕クラス?)

例えば、(6b)のXに「お金」を入れた文は S_1 = 「ZがYにお金をかける」で、この文について、Y,Zに適当な語句を補う課題が(i)簡単にできる場合には“2”を、(ii)なかなかできないが不可能ではない場合には“1”を、(iii)できないと思う場合には“0”を評定値として与えるように依頼した。

例えば、 S_1 の場合、Z = 「彼」、Y = 「事態の解決」を補い、「彼が事態の解決にお金をかける」を得るのが容易だと判断した人は2を評価値として与えることになる。

もし無条件に〔時間はお金である〕ならば、(6)–(9)の全部の例で、Xが〔お金〕クラスであることを認可する表現は例外なくXが〔時間〕クラスであることを認可するはずである。

だが、以下に見るように、明らかに概念譬喩写像理論の予測は成立していない。

2.3 時間を先領域とする譬喩群の複雑性

以上の調査の結果は図1に示した通りである。

この容認性のパターンが示唆するのは、以下の特徴である:

- (11) Xが収入としての{お金, 時間}を許容し、{労力}を許容せず、〔時間はお金である〕を支持し、〔時間は労力である〕を支持しないタイプ: e.g., 彼はそのおかげで{a. 三百万; b. 一週間; c. 手間}を稼いだ。
- (12) Xが支出としての{お金, 時間}を許容し、お金を目的語に取る用法が本用法で、〔時間はお金である〕を示唆するタイプ: e.g., 彼はその事業(の完成)に{a. 三千万; b. 三年; c. ??手間(暇)}を費やした。
- (13) Xが支出としての{お金, 時間, 労力}をどれも許容し、{{時間はお金である}, {労力はお金である}}ばかりでなく、{〔お金は労力である}, {〔時間はお金である}], {〔お金は(抵)抗力である}, {〔時間(は)抗力

である}}も示唆するタイプ: e.g., 彼はその事業(の完成)に{a. 三千万; b. 三年; c. 手間(暇)}をかけた。

- (14) Xが{お金, 時間, 労力}のすべてを許容するが、{時間}が基本で、〔時間はお金である〕の逆である〔お金は時間である〕を支持するタイプ: e.g., 彼はそのために{a. {お金; 二万円}; b. {時間; 三日}; c. {労力; ?手間}}をさいた。
- (15) Xが支出としての{お金, 労力}を許容するが、支出としての{時間}を許容せず、〔時間はお金である〕、ないしは〔労力はお金である〕を示唆するタイプ: e.g., 彼は家の修理にだいぶ{a. お金; b. *時間; c. 労力}を払った。
- (16) Xが支出としての{お金}を許容するが、支出としての{時間, 労力}を許容せず、〔時間はお金である〕を支持しないタイプ: e.g., 彼はその事件(の解決)に{a. 三千万; b. *三年; c. *労力}を支払った。
- (17) Xが省力化としての{労力, 時間, お金}を許容するが、{お金}は収入で読み換えられ、〔時間はお金である〕 (〔TIME IS MONEY〕)と〔お金は省かれた労力である〕 (〔MONEY IS SAVED EFFORT〕)を示唆し、〔時間はお金である〕を支持しないタイプ: e.g., 彼はそのおかげで{a. 三百万(の出費); b. ??一ヶ月; c. 手間(?*暇)}を省けた。

これらの一部—特に(11), (13)—は確かに〔時間はお金である〕を支持するが、事態はそれほど単純ではない。

2.4 より妥当な説明のための条件

〔TIME IS MONEY〕の妥当な説明は次の点を説明できる必要がある:

- (18) (15)で挙げた〈ZがYにXを払う〉の容認性のパターン、(16)で挙げた〈ZがYにXを支払う〉の容認性のパターンは明らかに〔時間はお金である〕の反証となっている。弱いながらも、〈YがXを儲ける〉の容認性のパターンも同様。
- (19) 収入としての〔お金〕と支出としての〔お金〕は明らかに別のものである。
- (20) (14)が示すように〈XがYにXをさく〉はXが時間クラスであることが本用法であり、〔お金は時間である〕 (〔MONEY IS TIME〕)という概念譬喩が存在すると考えないと説明に一貫性がない
- (21) 支出としての〔お金〕と〔時間〕は〔労力〕の下位クラスだが、収入としての〔お金〕と〔時間〕は〔労力〕の下位クラスではない。
- (22) (15)の対比を説明するには、〔労力はお金である〕という概念譬喩を考え、それから〔時間はお金である〕を経由して、〔時間はお金である〕が派生したと考えた方がいい。
- (23) 容認性のパターンから見て、(9)のタイプは他の関係がないと見ていい。だが、(9)のタイプの語の意味は明らかに資源性にかかわっている。これは資源性による説明にとっては矛盾となる事実である。
- (24) “注意を払う”が言えて、“{お金; 時間; 労力}を払う”が言えるのだから、〔注意はお金である〕と〔注意は労力である〕である概念譬喩の存在が示唆されるが、〔注意は労力である〕はともかく、〔注意はお金である〕は

| n=13 | 金 | | 時間 | | 労力 | | | | 特別な能力? | | | | | 子宝? | | |
|---------------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|--------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|
| | お金 | 三万円 | 時間 | 三日 | 労力 | 手間 | 暇 | 手間暇 | 注意 | 忍耐 | 我慢 | 能力 | 人気 | 資格 | 子供 | 子供を三人 |
| Xの値 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Yに(が)かかる | 2.0 | 2.0 | 2.0 | 2.0 | 1.6 | 1.8 | 0.3 | 1.7 | 0.3 | 0.7 | 0.0 | 0.3 | 0.0 | 0.0 | 0.1 | 0.0 |
| ZがYに(を)かける | 2.0 | 2.0 | 2.0 | 1.9 | 1.7 | 2.0 | 0.2 | 1.9 | 0.6 | 0.5 | 0.0 | 0.2 | 0.0 | 0.0 | 0.2 | 0.3 |
| Yに(を)払う | 1.9 | 1.9 | 0.0 | 0.0 | 0.9 | 0.1 | 0.0 | 0.2 | 2.0 | 0.2 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.2 | 0.2 |
| ZがYに(を)支払う | 1.9 | 2.0 | 0.1 | 0.0 | 0.1 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.2 | 0.1 |
| ZがYに(を)さく | 0.7 | 0.8 | 2.0 | 1.8 | 1.1 | 0.8 | 0.8 | 0.6 | 0.5 | 0.2 | 0.0 | 0.2 | 0.1 | 0.0 | 0.1 | 0.1 |
| ZがYに(を)費やす | 1.9 | 2.0 | 2.0 | 1.8 | 1.8 | 0.8 | 0.7 | 1.0 | 0.1 | 0.6 | 0.2 | 0.7 | 0.2 | 0.0 | 0.2 | 0.2 |
| Zが(を)儲ける | 2.0 | 1.9 | 0.4 | 0.3 | 0.1 | 0.1 | 0.1 | 0.1 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.1 | 0.0 | 1.2 | 0.6 |
| Zが(を)儲ける | 0.2 | 2.0 | 0.1 | 0.5 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.2 | 0.9 |
| Zが(を)かせく | 2.0 | 2.0 | 1.8 | 0.8 | 0.3 | 0.2 | 0.2 | 0.2 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 1.0 | 0.2 | 0.0 | 0.0 |
| Zが(を)かせく | 0.3 | 2.0 | 0.2 | 1.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.2 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| Zが(Yで)(を)得する | 1.2 | 1.7 | 1.2 | 0.8 | 0.5 | 0.4 | 0.3 | 0.2 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.1 | 0.1 | 0.0 | 0.0 |
| Zが(Yで)(を)得する | 0.1 | 2.0 | 0.1 | 1.4 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| (Zが)Y((する)に)は(が)必要 | 2.0 | 2.0 | 2.0 | 2.0 | 2.0 | 1.7 | 1.1 | 1.5 | 2.0 | 2.0 | 2.0 | 2.0 | 1.5 | 1.8 | 1.5 | 0.5 |
| (Zが)Y((する)に)は(が)要る | 1.8 | 1.8 | 1.8 | 1.3 | 1.8 | 1.3 | 1.0 | 1.3 | 1.9 | 1.9 | 1.7 | 1.8 | 1.6 | 2.0 | 1.2 | 0.6 |
| (Zが)Y((する)に)は(を)要する | 1.7 | 1.9 | 1.9 | 1.8 | 1.9 | 1.5 | 1.0 | 1.5 | 1.8 | 1.9 | 1.7 | 1.6 | 1.2 | 1.8 | 0.8 | 0.5 |

図1 「時間はお金である」という概念化に関係する容認度 d のパターン (区間 [0,2] の平均値) $d = 2.0$ を橙色で、 $1.5 < d \leq 2.0$ を黄色で、 $0.5 < d \leq 1.5$ を薄緑色で着色

不自然である。だが、CMT はどうやってこの定式化を避けるのか?

- (25) (15) の“払う”のデータが示しているのが、「お金は労力である」なのか、「お金は労力である」なのか、決めに欠ける。そのいずれにしても、それが概念譬喩なのか、下位クラス化なのか見極めづらい。「お金は労力である」は「お金の出費は労力である」だと見なせば、これはぞんざいな下位クラス化の一例であろう。

2.5 拡張された語の用法は何を意味しているのか?

次のように問題を見直してみることは有益であろう:

- (26) (1) のような拡張的な用法 — この場合、例は英語であるけれども — が存在することは、それ自体として**概念体系に関して、いったい何を意味しているのか?**

拡張された用法の説明の際に、概念譬喩はどれぐらいの“貢献度”(あるいは“寄与率”)をもつものなのだろうか? 100% でないのは自明であるとして、70%? 50%? 30%? — それは測定してみないと、わからない。もう少し特定の言うと、

- (27) 概念譬喩は (1) にあるような事例の詳細を十分にうまく説明できるほど強力な説明モデルなのだろうか?
 (28) (1) のような用法の説明の際の概念譬喩による説明の寄与率が、仮に 50% 程度だとして、この現象を説明するのに概念譬喩の存在は必要不可欠なのだろうか?

この段階では決着をつけられないが、以上の考察から少なくとも今の段階で明らかなのは「資源とはそもそも何か?」という問題に決着をつける必要があるということである。

2.6 「時間」が「資源」と見なされる本当の理由

2.6.1 概念の資源性の実態調査

問題の核心は、語法的に見て時間がまるで資源であるように振る舞うのは、本当に「時間は資源である」が譬喩なのか、本当に概念譬喩の結果か? ということである。この問い実証的に答えを出すため、以下の手順で動詞と名詞群の共起調査を行なった。これは概念譬喩の実証的発見法を定義する。

(29) にある 37 個の語句を (30) にある 29 個の表現の X に入れた際、 Y, Z に適当な名詞句 (e.g., $Z =$ “彼”, $Y =$ “問題の解決”) を補って難なく文を作ることができる場合には “2” を、苦勞する場合には “1” を、どうやってもできない場合には “0” を調査シートのセルに評価値として記入するように求めた。

(29) 資源性調査項目:

1. お金, 2. 資金, 3. 三万円, 4. 時間, 5. 電気, 6. 水道, 7. 交通, 8. 交際, 9. 労力, 10. 石油, 11. 努力, 12. 金(かね), 13. 財産, 14. 情熱, 15. 食べ物, 16. 子供, 17. 飲み物, 18. 忍耐, 19. 手間, 20. 交友関係, 21. 暇, 22. 手間暇, 23. 人気, 24. 三日, 25. 資格, 26. 労働, 27. ムダ, 28. 人材, 29. 友人, 30. チャンス, 31. 能力, 32. 十二人, 33. 希望, 34. 愛情, 35. 資源, 36. 森林, 37. 野生動物

(30) 資源性調査環境:³

1. Y が X をおしむ; 2. Y が X 代をおしむ; 3. Y が X 費をおしむ; 4. Y が X を節約する; 5. Y が X 代を節約する; 6. Y が X 費を節約する; 7. Y が X を節約する; 8. Y が X 代を節約する; 9. Y が X 費を節約する; 10. Y が (Z のための) X を失う; 11. Y が (Z に) X をかける; 12. Y が (Z に) X を費やす; 13. Y が X を守る; 14. Y が (Z に) X を投資する; 15. Y が X を保つ; 16. Y が X を残しておく; 17. Y が (Z に) X を投じる; 18. Y が X を消費する; 19. Y が (Z に) X を使う; 20. Y が X を維持する; 21. Y が (Z に) X を使いすぎる; 22. Y が X を保存する; 23. (Z のための) X が枯れる; 24. (Z のための) X がなくなる; 25. (Z のための) X が残り少ない; 26. (Z のための) X が失われる; 27. (Z のための) X が切れる; 28. (Z のための) X が不足する; 29. (Z のための) X が枯渇する;

2.6.2 調査結果

図2に資源性の高い概念を表わしやすい名詞を挙げる。図では左から右へ、資源性の高い概念を表わしやすい名詞が並ぶように配置した。

図2は「資源」概念の内容に関して有意義な情報を提供しているが、これを見ても、「資源」概念が何であるかは明白ではない。その理由は二つある。

- (31) 「資源」という語が「資源」概念のみを表わしているとは限らない。語としての「資源」は**それ自体が多義的で**、容認性のパターンに概念譬喩の成立を読み取る方略は CMT 流の説明を原理的に自己成就的にする。**容認性のパターンの解釈は、この意味での説明の自己成就を回避するための、何らかの制約を受ける必要がある。**

- (32) CMT が (例えば英語で) 「TIME」とか「RESOURCE」とか「LOVE」とか書いて、*time* という語の表わす概念(領域)、*resource* という語の表わす概念(領域)、*love* という語の表わす概念(領域)をエンコードしたとするのは、概念(領域)を原子的に取り扱い、概念(領域)に

| n=8 | 資源 | 資金 | 石油 | お金 | 財産 | 時間 | 金 | 食べ物 | 森林 | 人材 | 飲み物 | 三万円 | 電気 | 能力 | 情熱 | チャンス | 労力 |
|-------------------------------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| {節約する,消費する,維持する,残り少ない,なくなる,枯渇する}の平均 | 1.85 | 1.8 | 1.64 | 1.64 | 1.6 | 1.52 | 1.51 | 1.29 | 1.28 | 1.28 | 1.23 | 1.21 | 1.11 | 1.04 | 1.03 | 1 | 0.93 |
| Yが__を守る | 1.88 | 1.63 | 1.5 | 1.88 | 2 | 1.75 | 1.63 | 1.75 | 2 | 1.25 | 1.63 | 1.5 | 0.75 | 0.63 | 0.5 | 0.75 | 0.13 |
| Yが__を保存する | 1.63 | 1.13 | 1.38 | 1 | 1.25 | 0.25 | 0.25 | 1.75 | 1.88 | 0.25 | 1.75 | 0.63 | 0.25 | 0.13 | 0.25 | 0 | 0.13 |
| Yが__を残しておく | 1.88 | 2 | 1.75 | 2 | 2 | 1.88 | 2 | 2 | 2 | 1.63 | 2 | 2 | 0.63 | 0.63 | 0.63 | 1.38 | 1.25 |
| Yが__を保つ | 1.5 | 1.25 | 0.88 | 0.63 | 1.5 | 1 | 0.63 | 0.63 | 1.25 | 1 | 0.38 | 0.75 | 0.75 | 1.13 | 1.75 | 0.38 | 0.75 |
| Yが__を節約する | 1.75 | 1.75 | 1.63 | 2 | 1.13 | 2 | 2 | 1.38 | 0.63 | 0.63 | 1.25 | 1.88 | 1.88 | 0.25 | 0.13 | 0.25 | 1.75 |
| Yが__を消費する | 2 | 1.75 | 2 | 1.75 | 1.38 | 1.75 | 1.5 | 1.13 | 0.38 | 0.75 | 1 | 1.5 | 2 | 0.63 | 0.25 | 0.63 | 1.38 |
| Yが__を儉約する | 1.25 | 1.5 | 1.5 | 2 | 0.38 | 1.13 | 1.75 | 0.38 | 0 | 0.13 | 0.25 | 1.5 | 1.13 | 0.25 | 0.13 | 0 | 0.5 |
| Yが__をおしむ | 1.5 | 1.63 | 1.38 | 2 | 1.25 | 2 | 2 | 1.63 | 0.75 | 1.25 | 1.43 | 1.63 | 1 | 1.38 | 1 | 0.88 | 2 |
| Yが__を維持する | 1.75 | 2 | 1 | 1 | 1.75 | 0.63 | 0.88 | 0.38 | 1.63 | 0.88 | 0.25 | 0.88 | 0.75 | 1.75 | 2 | 1.13 | 0.63 |
| Yが(Zのための)__を失う | 1.75 | 2 | 1.38 | 2 | 2 | 2 | 2 | 1.5 | 1.25 | 2 | 1.5 | 1.88 | 0.75 | 1.75 | 2 | 2 | 0.88 |
| Yが(Zに)__を投じる | 1.13 | 2 | 0.88 | 1.75 | 1.75 | 1.38 | 1.75 | 0.13 | 0.13 | 1.5 | 0.13 | 2 | 0.5 | 0.5 | 1.13 | 0.5 | 1.63 |
| Yが(Zに)__を投資する | 0.63 | 1.38 | 1 | 1.75 | 1.75 | 1.13 | 1.75 | 0.38 | 0 | 1.5 | 0.25 | 1.75 | 0.13 | 0.25 | 0.25 | 0.38 | 0.63 |
| Yが(Zに)__を使う | 1.88 | 1.5 | 1.63 | 2 | 2 | 2 | 1.88 | 0.88 | 0.88 | 1.38 | 0.88 | 2 | 1.5 | 1.63 | 0.25 | 1 | 1.75 |
| Yが(Zに)__を使いすぎる | 1.75 | 1.88 | 1.88 | 2 | 1.88 | 2 | 1.75 | 0.38 | 0.63 | 1.25 | 0.13 | 0.25 | 1.88 | 1.25 | 0.5 | 0.63 | 1.88 |
| Yが(Zに)__を費やす | 1.5 | 1.5 | 1.25 | 1.88 | 2 | 2 | 2 | 0.63 | 0.13 | 0.38 | 0.5 | 2 | 0.88 | 0.88 | 2 | 0.38 | 1.5 |
| Yが(Zに)__をかける | 0.5 | 0.75 | 0.38 | 2 | 0.88 | 2 | 2 | 0.13 | 0 | 0.63 | 0.13 | 1.75 | 0.25 | 0.38 | 1.88 | 1.13 | 1.75 |
| (Zのための)__が不足する | 1.88 | 2 | 1.75 | 2 | 0.63 | 2 | 1.88 | 2 | 1.13 | 1.88 | 2 | 1 | 1.63 | 1.13 | 1.88 | 0.63 | 1.25 |
| (Zのための)__が残り少ない | 2 | 2 | 1.75 | 1.88 | 1.75 | 2 | 2 | 1.75 | 1.5 | 1.38 | 1.75 | 0.38 | 1.5 | 0.25 | 0.38 | 1.63 | 0.63 |
| (Zのための)__がなくなる | 2 | 2 | 1.75 | 2 | 2 | 2 | 2 | 1.88 | 1.63 | 1.5 | 1.75 | 2 | 1.13 | 1.75 | 2 | 2 | 1 |
| (Zのための)__が枯渇する | 2 | 2 | 2 | 0.75 | 1.63 | 0.5 | 0.75 | 0.75 | 0.5 | 1.5 | 0.63 | 0.38 | 0.63 | 1.13 | 0.88 | 0.63 | 0.25 |
| (Zのための)__が切れる | 1.5 | 1.88 | 1.63 | 1.25 | 0.5 | 1.25 | 1.25 | 1.13 | 0 | 0.88 | 1.25 | 0.63 | 1.38 | 0 | 1.13 | 0.13 | 0.63 |
| (Zのための)__が枯れる | 1.75 | 1.38 | 1.75 | 0.5 | 0.75 | 0 | 0.25 | 0.38 | 1.5 | 1.13 | 0.5 | 0 | 0.38 | 1.13 | 1.88 | 0.38 | 0.13 |
| (Zのための)__が失われる | 1.88 | 2 | 1.5 | 1.88 | 1.88 | 2 | 1.88 | 1.5 | 1.75 | 1.88 | 1.5 | 1.88 | 1 | 1.63 | 2 | 2 | 0.88 |

図2 名詞がコードする概念の資源性を基礎づける容認性のパターン (区間 [2.0, 0.0] の平均値) [2.0, 2.0] を橙色で, [1.9, 1.0] を黄色で, [1.0, 0.1] を薄緑色で着色

対し粗っぽい近似を与える方法でしかない。

実際に [[TIME]] とか [[RESOURCE]] とか [[LOVE]] の概念それ自体を分析するとなれば, それらの実体は分散的 (distributed) なもので, 意味特徴/素性 (semantic features) を使わないとうまく表示できないと考えなくてはならない⁴. resource という語は [[RESOURCE]] 以外の概念 (e.g., 例えば [[FUND]]) も表わすのだから, これを考えただけでも [[RESOURCE]] という表記が「resource という語に固有の概念を表わす」とするのは, 実際のところ表記によるごまかしであるのは明らかである. CMT の説明はこの種のごまかしに本質的に依存している。

2.7 概念譬喩の実証的認定法

2.7.1 資源性の高い概念群の特定

{資源, 資金} 概念を中核とした意味空間を構成するために, 私たちは選択制限を利用した次の手法を用いる。

(33) にある 13 個の環境 $F(x, y, z)$ は $X = \text{[資源]}$ のとき, 1.75 以上の評定値をもっている。この特徴を, これらの環境が x の [資源] 性への制約を表現している⁵と見なし, (33) の 13 個の環境の X の位置への (29) の名詞が現われたときの容認度の得点 (平均) を資源性の指標 R とする

- (33) i. Y が (Z のための) X を守る; ii. Y が (Z のための) X を残しておく; iii. Y が (Z のための) X を節約する; iv. Y が (Z のための) X を維持する; v. Y が (Z のための) X を失う; vi. Y が (Z のために) X を使う; vii. Y が (Z のために) X を消費する; viii. (Z のための) X が不足する; ix. (Z のための) X が残り少ない; x. (Z のための) X がなくなる; xi. (Z のための) X が枯渇する; xii. (Z のための) X が枯れる; xiii. (Z のための) X が失われる;

この指標の下で, 資源性の高いと思われる概念を表わしていると考えられる語は, 以下の (34I) のクラス 1, (34II) のクラ

ス 2 だと考えられる:

- (34) I. $1.5 \leq R \leq 2$ (7 語句, 18%):

資源 (1.85), 資金 (1.8), 石油 (1.64), お金 (1.64), 財産 (1.60) 時間 (1.52), 金 (1.51)

- II. $1.0 \leq R < 1.5$ (9 語句, 23%, 累計 41%):

食べ物 (1.29), 森林 (1.28), 人材 (1.28), 飲み物 (1.23), 三万円 (1.21), 電気 (1.11), 能力 (1.04), 愛情 (1.03), 情熱 (1.02), チャンス (1.00),

ただし, クラス 1, 2 の語のうち, どれがカテゴリー化によって認可されるもので, どれが概念譬喩によって認可されるものなのかは, このデータを見ただけでは明らかではない⁵. つまり, 概念譬喩が成立しているか否かを判定するための条件は自明ではない。だが, CMT では, それがまるで自明であるかのような前提から議論は始まっている。この理由から, 概念譬喩認定のための明示の手順を考案するのは必至であり, 以下ではそれを試みることにする。

2.7.2 資源性に係わるカテゴリー化の特定

(34) のクラス I にある 6 つの語を基にして, 次の概念譬喩の候補が特定可能である:

- (35) a. 資源は資源である (自明なカテゴリー化)
 b. 資金は資源である (非自明なカテゴリー化)
 c. 石油は資源である (非自明なカテゴリー化)
 d. (お) 金は資源である (非自明なカテゴリー化)
 e. 時間は資源である (非自明なカテゴリー化)
- (36) a. 資金は資金である (自明なカテゴリー化)
 b. 資源は資金である (非自明なカテゴリー化)
 c. 石油は資金である (非自明なカテゴリー化)
 d. (お) 金は資金である (非自明なカテゴリー化)
 e. 時間は資金である (非自明なカテゴリー化)
- (37) a. (お) 金は (お) 金である (自明なカテゴリー化)
 b. 資源は (お) 金である (非自明なカテゴリー化)

- c. 資金は(お)金である(非自明なカテゴリー化)
 - d. 石油は(お)金である(非自明なカテゴリー化)
 - e. 時間は(お)金である(非自明なカテゴリー化)
- (38)
- a. 時間は時間である(自明なカテゴリー化)
 - b. 資源は時間である(非自明なカテゴリー化)
 - c. 資金は時間である(非自明なカテゴリー化)
 - d. 石油は時間である(非自明なカテゴリー化)
 - e. (お)金は時間である(非自明なカテゴリー化)

ここで肝心なのは、以上の自明でないカテゴリー化の意味の通るものの全部が(概念)譬喩であるわけではなく、それから譬喩として適切なもののみが選定されなければならないという点である。

2.7.3 CMTの譬喩の認定基準は自家撞着的

この点は重要である。なぜなら、そうしない限り、概念譬喩以外の原因で概念拡張が起こっている可能性を体系的に無視する結果になるし、CMTは実際にそうしていて、その結果として過剰般化が生じているからである。

(35)–(38)の語群のクラスわけからは、語の用法を決定する概念化が(a)正真正銘のカテゴリー化によるものなのか、(b)概念譬喩によるものなのか、(c)概念譬喩を媒介にしない概念拡張によるものなのか、(d)無意味なものなのかは明らかではない。

この段階でCMTの本質的な欠陥が明らかになる:

- (39)
- a. CMTでは、(a), (b), (c), (d)の判別基準は研究者の直観で、明示的でも実証的でもない。
 - b. 概念譬喩とそうでないものの区別は、CMTの理論的利害から独立した形では規定されていない。

実際、Lakoff学派の概念譬喩の認定基準は自己成就的で甘すぎる。概念譬喩の定義と別に彼らが**実際にやっていること**を明示化すれば、

- (40) 語 w の字義通りの意味を m とするとき、ある文脈で語 w が m 以外の「非字義的」意味 m' で用いられ、 m' がメトニミーと分類できないならば、 m' はすべて w が表わす概念の譬喩(写像)の結果である

ということになるが、この基準は自家撞着的で、譬喩という**説明概念の無用な拡大解釈**によって議論の混乱を招いている。

2.7.4 本稿が提案する概念譬喩の認定基準

重要な点は、**概念拡張が譬喩写像によって生じる必然性はない**という可能性を無視すると、非譬喩を譬喩として認定することになるということである。これが私たちが「CMTの説明が自己成就的である」と言うことに意図することの正確な意味である。

この問題を克服する手段として、私たちは以下に規定するような、より限定的な概念譬喩の認定基準を提案する:

- (41) §2.6.1の手順で得られた $F: \llbracket x \text{ IS } y \rrbracket$ (x, y は概念(領域)の候補群(例えば(35)–(38)のうち、
- a. F の意味が通り(つまり「石油は時間である」のような概念化不可能なものを除く)、
 - b. F が y というクラスの下位クラス化としては記述可能でない

という二条件を満足する場合のみを概念譬喩と認定

Lakoff派の研究者は特に(41b)に関して非常に認定基準が

甘い。彼らは可能な限り下位クラス化の規模を小さく、可能な限り概念譬喩のクラスを大きくしようとする。彼らは非字義通りの意味で語が使われていて、それがメトニミーでない場合、それが譬喩だと短絡する⁶。こうして、**譬喩以外の原因による概念拡張は、定義により存在しなくなる**。これは、CMTの検証バイアス以外の何ものでもない。

だが、 y というクラスの下位クラス化として F が適切に記述可能な場合には、たとえ F の意味が字義通りでなくても、**概念譬喩以外の原因によって生じた y の概念拡張の結果であるとするのがもっとも事実**に即した結論で、それ以上のことを読み取るのは過剰般化である。

3 概念譬喩理論の説明力の評価

以上で検討した事実はCMTの反証ではなく、**先領域の覆し(Target Domain Overrides: TDO)**で説明できる事実だと反論する研究者もいるだろう。だが、これは(少なくとも「有効な」反論にはなっていない。次節では、その理由を述べる。

3.1 先領域の覆しの「機能」

通常、CMTの説明は先領域の覆しを許すことを前提としている。だが、その説明にどれほど内実があるかは、理論的整合性とは別の基準で評価されなければならない。端的に言うと、整合的な理論が「空虚」な理論でないという保証はない。

実際、不変性原理で「保護」された譬喩理論は強力すぎ、それが与える説明は空虚である。なぜか?

譬喩写像に**不変性原理(Invariance Principle)**の成立を要請し、先領域の覆し(TDO)を許す譬喩写像理論が規定している内容は、事実上、次に等しい:

- (42)
- a. 譬喩は概念写像 $M: S \rightarrow T$ によって元領域 S の概念構造を先領域 T に写像し、その際、 S のイメージスキーマ構造 S^* を保存する。
 - b. ただし、 M (自体が S^* の保存か) が T の内容との非互換性によって退けられるという**例外を除く**。

先領域の覆しが規定している内容は(42)の「例外を除く」という部分であるが、問題はこの「例外」性なのである。

3.1.1 「例外」は本当に例外か?

(42b)でCMTが規定する「例外」が例外的に「少数」であるという保証はない。この意味での例外性は「定義にあっていない」という意味であって、次のことに気づくことは**例外性の錯覚(exceptionality fallacy)**を避けるために必要不可欠である:

- (43) これらの例外が無視できるほど数が少ないという条件が経験的に満足されているという保証はどこにもない。

例外が例外であるとされる理由は、それが「少数であり、説明全体に対する影響が少ない」ということなのであるが、「説明全体に対する影響」がいつのまにか「理論に対する影響が少ない」と読み替えられてしまっている。

「少数であり、説明全体に対する影響が少ない」という本来の意味での例外性は(42)の定義からはまったく帰結しない。従って、それは(42b)とは独立に実証される必要がある。

先領域の覆しが「数として少数であり、説明全体に対する影響が少ない」という正しい意味での「例外処理」になっているかどうかは、CMTの理論から論理的に帰結可能な事柄ではない。それは**経験的な手段によって評価されるべき事柄**である。

(42) のような我田引水の形で例外を決めることは、Chomsky 派の言語学者が文法事象の「中核と周辺」を規定する際に、「中核性」と「周辺性」の条件を自分の理論に都合のよいように、恣意的に決めていたのと同じである。

理論的に重要でないことを例外だと見なす傾向はどの分野でも顕著であるが、それには理由がある: ある現象 P が理論的に重要でない理由は、非常に多くの場合、 P が理論によって説明可能でないからである。この意味で、例外性の誤謬は非常に強い説明の誘惑 (explanation temptation) に根差しており、経験を積んだ科学者でも避けることが非常に難しい。実際、これが元で科学の様々な領域で数々の体系性の錯覚 (systematicity fallacy) が生じている。

虚心坦懐な観察が示唆するのは、次の可能性である:

- (44) CMT の予測する「一般性」を破り、TDO で退けられている「例外」群は、実は「無視してよい」「数少ない」例外ではなく、逆に現象の大半である。

この種の「例外性に関する錯覚」は言語学に頻発するが、これは言語学に限ったことではなく、多くの自然科学にも発生する。これは、線型近似で「解ける」現象ばかり扱っていると、いつのまにか世の中には線型現象があふれていて、非線型現象が「例外」だと錯覚するのとよく似ている。そのような錯覚に陥っている自然科学者はたくさんいるけれど、世の中の大半の現象は、彼らの思いこみに反して、非線形である。よく知られているように、これはカオス理論、複雑性の科学の勃興の「思想」的障害になった [5, 26]。

線型性の思いこみのアナロジーからもわかるように、CMT は理論的記述可能性と一般性を混同し、ありもしない例外性を想定している可能性があるし、私たちの見こみでは確実にそうしている。§2.3, §2.7 で扱ったデータが示唆しているのは、このことなのである。

3.1.2 概念譬喩理論は反証不能のおそれあり

仮に例外が本当に「少数」の例外だとしても、まだ問題は解決しない。(42) が意味することは次である:

- (45) CMT の反証不能の可能性:

先領域の覆しの経験的内容が明示され、「例外」がいつ成立するかが事前に予測できない限り、(42) は常に成立し、それ故、CMT は反証不能な理論である。

先領域の覆しが(有限個の規則で)明示的に述べられるかどうかは、実は論理的に明らかではなく、不変性原理が経験的内容をもつ規定かどうかは、その定義からはわからない。従って、不変性原理を仮定する CMT が反証可能で有意な理論であるという保証はない。この点は明らかに CMT の枠組みで研究している人々に意識されていない点なので、ここで強調しておきたい。

この問題を回避することが必要だが、そのためにはまず、先領域の覆しが有意であることの証拠を示すことが必要である。だが、有意な証拠とは譬喩写像の定義によって無条件に与えられるようなものであってはならず、経験的な調査によって理論とは独立に検証されたものでなければならない。だが、私に見る限り、そのような証拠を実証的に示そうとする努力は CMT の研究者には皆無である。

3.1.3 内実の伴わない大言壮語

仮に先領域の覆しの妥当性に有意な証拠が示せたとしても、それでも問題はなくなる。不変性原理で守られた CMT の主張の内容をよくよく考えてみよう。それは実際には、次のような非常に弱い主張に過ぎない:

- (46) [[ある種の T はある種の S である]]

例えば、

- [[ある種の時間はある種のお金である]]
- [[ある種の愛はある種の旅である]]
- [[ある種の議論はある種の戦いである]]

これは「ある種の T 」や「ある種の S 」の「ある種の」という限定が「この種の」という形で明示可能でない限り、多かれ少なかれ成立し、ほとんど意味のない一般化である。CMT が示していることは、「ある種の T はある種の S である」ことが、その数はともかく、とにかく成立することである。それはそれで重要なのだが、それでは譬喩という現象の正確な記述としては不十分なのである。それは一般的すぎて、「文法現象は変形によって説明できる」と主張することが記述の一般化として誤りではないのと同じ程度の妥当性しかもたない。

Lakoff らが [14, 15] のような著書で主張している内容と経験的に CMT が述べている内容とのあいだには非常に大きな隔りがある。(46) に述べた程度に限定された予測力しかもたないのに対し、彼らの主著はまるで譬喩がヒトの思考や認知のパターンの重要な部分を説明するかのよう強い調子で描かれている。これは貧弱な説明力を隠した信用詐欺、あるいは内実の伴わない大言壮語以外の何ものであるのだろうか?

(46) という形に明示化してみると、CMT が「説明」している内容は実に些細なこと、ほとんど自明なことである。それを説明するのに、譬喩写像をもちだすことは、本当に不可避なのだろうか? もっと単純で明快な説明はないのだろうか?

3.1.4 より単純な説明を求めて

仮に先領域の覆しに経験的な内容があり、CMT が反証可能な理論だということになったとしても、それで話が終るわけではない。まだ次の可能性が残っているからである:

- (47) 不変性原理によって守られた CMT は、もっと単純明快に説明可能な内容を、不必要な仮定の導入 (譬喩写像、不変性の原理) によって意味もなく複雑にしている。

これが意味するのは、ちゃんと探せば、CMT より、もっと単純で精練された説明モデルが見つかるはずだということである。実際、そのような説明の枠組みは潜伏性の上位スキーマ化 (媒介) モデル (Implicit Super-schematization (Mediation) Model: SMM) という形で [38, 37, 39] などで示唆されている。その概要を、簡単に解説しておこう⁷。

3.2 潜伏性の上位スキーマ化 (媒介) モデルの概要

SMM の概要は次の通りで模式化すると図 3 のようになる:⁸

- (48) あるフレーム F (元) から別のフレーム G (先) への譬喩写像関係 M が成立するのは、(i) G が字義通りに解釈され、(ii) 次の条件を満足する H が M を媒介にするとき (i.e., $M(x) = i(h(x))$) に限る:⁹

- フレームは (意味) 素性の組織化としてのスキーマ (schema) であり¹⁰,
- $F[+f]$, $G[-f]$ に素性 f の値に対立があるとき、その対立の中和された $H[\pm f]$ を (F, G に共通の) 上

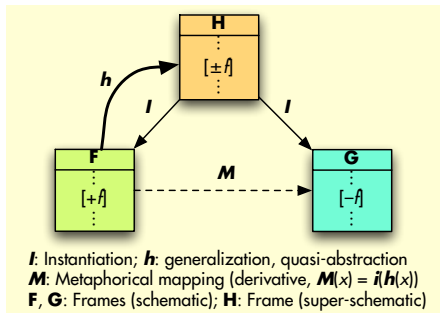


図3 上位スキーマ H による譬喩写像 M の媒介: F は元領域, G は先領域に相当

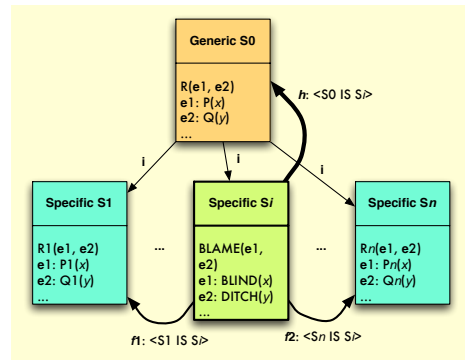


図4 [[GENERIC IS SPECIFIC]] の写像の構造 (“Blind blames the ditch” の場合)

位スキーマ (super-schema) だとする

- c. F, G は当然, H の具現化 (instantiations), ないしは肉づけ (elaborations) である
- d. $h: F \rightarrow H/G$ の効果を F の (G のための) 上位スキーマ化 (super-schematization) と呼ぶ¹¹.

3.2.1 SMM は譬喩と非譬喩を区別する

CMT では, 概念譬喩の定式化自体が杜撰であるため, 譬喩と譬喩でないものの境界が非常に曖昧である. 概して言う, CMT では字義通りでない意味があれば, それらはすべて概念譬喩と見なされる.

CMT の譬喩の認定は二重底であることに注意しよう. 彼らのやっていることは, 実は次なのである:

(49) 概念譬喩理論での譬喩の認定条件

必要条件: 任意の語 w について, w の意味が字義通りの意味で理解できないものであれば—つまり, w に意味拡張があれば—譬喩が原因であると疑われる.

十分条件: この意味拡張に異なる領域間の対応づけが関与していれば, 譬喩である.

だが, これは明らかに概念譬喩の認定方法としては杜撰過ぎる. 必要条件に関して, 意味拡張が譬喩以外の要因で生じている可能性がマトモに考慮に入られていない. そのため, 異なる領域間の対応関係があるだけで, それが譬喩であることの十分条件であると見なされる.

この二重底の説明の顕著な例が, [[一般性は特殊性である]] ([[GENERIC IS SPECIFIC]]) の譬喩, あるいは一般レベルの譬喩 (Generic-level Metaphor) と呼ばれるもの (e.g., *Blind blames the ditch* の諷的解釈) である.

Blind blames the ditch の解釈に限らず, 概念譬喩理論で概念譬喩と呼ばれているものには異なる種類のものがあることを, 上位スキーマ化モデルを用いて, 図4に簡単に示すことができる.

Lakoff らが [[GENERIC IS SPECIFIC]] と呼んでいる写像 f は図4では合成関数 $h \circ i_n$ である. これに対し, [16] 以前に譬喩と呼ばれていたのは f_1, \dots, f_n のような対応関係のみである. ここで, i は S_0 から $\{S_1, \dots, S_k, \dots, S_n\}$ への具現化の関係である. 図3も参照のこと.

重要な点は, S_i が S_0 の代表例 (representative case) として機能するという点である¹². これが [[GENERIC IS SPECIFIC]] の成立条件である. これは, ある特殊事例 (e.g., $S_i = \text{Blind blames the ditch}$) から, それが代表する事例の集合 $S = \{S_1,$

$\dots, S_n\}$ へのアクセス (f_1, \dots, f_n) が [[GENERIC IS SPECIFIC]] の実態である. それらはすべて, 潜伏性の上位スキーマ H を経由して行われる.

3.2.2 なぜ一般レベルの「譬喩」???

$\mathcal{F} = \{f_1, f_2, \dots\}$ のような対応関係の種類と h の対応関係の種類は同じではない. 従って, 仮にアクセスされる表象が同一であろうとも \mathcal{F} が譬喩である理由と h が譬喩である理由とは同じではない. 実際, h が譬喩だと考えるのは, まったく必然性のない, 認知科学の研究の伝統を無視した暴挙としか言いようがない譬喩概念の過度の一般化である. このような過剰な一般化を行なうとき, Lakoff らは一般化や抽象化のような譬喩以外の認知メカニズムに譬喩を回収する可能性については, まったく考慮に入れていないように見える¹³.

例えば Lakoff は次のように言う:

- (50) ターナーと筆者はある個別の知識構造から共通レベルの構造を引き出す過程を指して, 「共通性は個別性である」譬喩 [[GENERIC IS SPECIFIC]] と呼んだ. 自分たちはこれが一般を個別の観点から理解する一般的なメカニズムだと考えている.

もし不変性仮説が正しいとすれば, 「共通性は個別性である」メタファは不変性仮説が要求することを最低限のレベルで満たすことによって写像を行っているメタファであり, それ以上の何ものでもないということになる. [12, 邦訳, pp. 54-55]

そう呼ぶのは彼らの自由だが, それに内実があるかどうかは, それとはまったく別の問題である.

Lakoff が言うように, [[GENERIC IS SPECIFIC]] が「一般を個別の観点から理解する一般的なメカニズム」だと見なせるのはまちがいないが, **それが譬喩でなければならぬ必然性はどこにもない**. 彼は単に譬喩という現象を概念写像一般と同一視可能であるように**拡大解釈**しているだけである. これは確証バイアス以外の何ものでもない.

3.2.3 CMT 陣内部での批判

この点は概念譬喩研究者のあいだでも自覚されており, 例えば鍋島 [31, p. 147] は次のように [[GENERIC IS SPECIFIC]] が概念譬喩でない理由を五つ挙げている:

- (51) (i) 定式化に反している; (ii) Generic と Specific の関係は抽象レベル上の関係である; (iii) Generic から Specific へは Instantiation の関係となる; (iv) こ

とわざに限らず、譬喩一般に Generic Level が存在;
(v) 譬喩に限らず、一般に Generic Level が存在

これらはまったく正しい指摘である¹⁴。また, Grady [10, p. 91] も遠慮がちに¹⁵, 次のように言う:¹⁶

(52) We probably do not want to GENERIC IS SPECIFIC as a metaphor per se, if we would like to reserve the term for particular figurative pairings of concepts.

だが, このような正気が現在の譬喩研究にどれほど浸透しているかは疑問である。このような理性の声は少なくとも Lakoff と Johnson [15] には届いていないようだ。

3.3 上位スキーマ経路モデルによる現象の特徴づけ

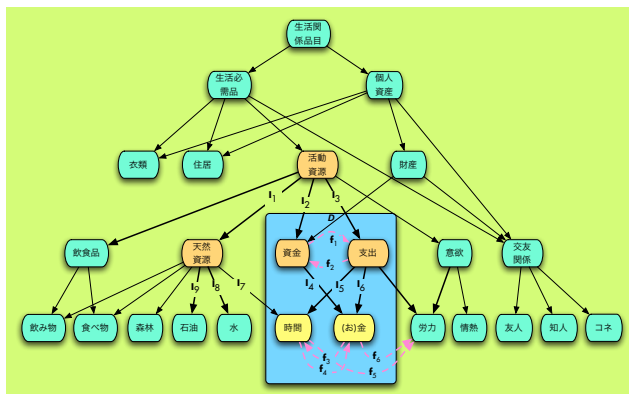


図5 資源性に関する概念の部分的 HFN (紫色の破線は概念譬喩を表わす)

分析の締めくくりに資源性に関する概念譬喩群のを上位スキーマ経路モデルで説明してみよう。

(意味) フレームの階層化されたネットワーク (Hierarchical Frame Network: HFN) [29, 34, 35, 36] の分析を仮定した分析の概要は, 図5に示す通りである。ただし, この図は部分的に不完全であり, また煩雑さを避けるため, フレームの内部構造を表わすことはしなかった。

3.3.1 『TIME IS MONEY』の説明

D は 『TIME IS MONEY』 が焦点化される領域で, I_4, I_5, I_6 の具体化の関係から構成される。『(お)金』は『資金』の代表例であり, 『時間』, 『(お)金』, 『努力』は『支出』の代表例である。 f_1, \dots, f_6 が概念譬喩写像である。これらを媒介しているのは, 『支出』であり, これが図3の上位スキーマ H (の一部) に相当する。

- (53) f_1 : 『EXPENSE IS A FUND』
 f_2 : 『FUND IS AN EXPENSE』
 f_3 : 『TIME IS MONEY』
 f_4 : 『MONEY IS TIME』
 f_5 : 『EFFORT IS TIME』
 f_6 : 『EFFORT IS MONEY』

この分析が正しいならば, 『TIME IS MONEY』と『TIME IS EFFORT』, 『EFFORT IS MONEY』, ... の概念譬喩の部分的体系の基盤となっているのは, 一般化された『支出』概念である。

3.3.2 『TIME IS A RESOURCE』の説明

I_7 が 『TIME IS A RESOURCE』 をコードする具体化の関係である。この概念化では『資金』と『資源』との差別化に

よって『資源』の天然性の側面が強調される。従って, この意味での『資源』は非天然性の『活動資源』である『資金』の代表である『(お)金』とは同一視可能でない。

図には示していないが, 資源性に係わる概念譬喩群を媒介しているのは, I_1, I_2, I_3 のルートにある『活動資源』であり, これが図3の上位スキーマ H (の一部) に相当する。

『必要』性は『資源』性の上位概念で, (9) の語彙類 (e.g., $\langle Z$ が $\langle Y$ するには $\langle X$ が必要 \rangle) によってコードされている概念だと考えられる (図1を参照)。『必要』性は例えば, 図5の『生活必需品目』によって具現化される。

私たちの分析が正しければ, Lakoff らは天然資源の概念, 天然/非天然の区別を無視した活動資源の概念を混同し, かつ活動資源の概念と資金の概念を混同している。こんな杜撰な概念分析で, いったい概念体系の何が説明されているのだろうか? 彼らの行なっていることは, 「資源」という語の概念的曖昧性に無自覚であることに由来する自家撞着か, 「資源」という語を概念的曖昧性をうまく利用して—つまり「資源」という語を譬喩的に用いて—自説に都合のよい論点のすり替えを行なっていること以外の何ものでもないように思われる。

4 結論

『時間』と『資源』に関係する語法を定量的な手法で解析し, その結果を確証バイアスのない目で見ると, 『時間』が概念譬喩とする根拠は薄弱で, 非譬喩的に『時間』が資源である』の概念化が存在すると結論する。特に図2に示した結果では, 『時間』の資源性は『(お)金』よりも高いか少なくとも同程度であることに注意された。

これが正しいとすれば, その含意の一つは抽象的概念の代表例と見なされている『時間』が非譬喩的に理解されうということであり, CMT の中心的な主張に矛盾する: Lakoff 派は (Glucksberg らの反証実験 [8], Murphy の批判 [18, 19] を無視しながら) 繰り返し “概念譬喩は抽象的概念を具体的概念を通じて理解するために必然的に存在する” と主張するが, これは私たちの解析結果では支持されない。

4.1 概念譬喩の特徴づけの問題

実際, 次の可能性はかなり高い: 先領域の概念と元領域の概念の間の抽象性の差は概念譬喩の成立条件とは関係ないか, あるとしても弱い相関のみである。これはもちろん, Lakoff 派の主張である “「具体的経験を通じて抽象的经验を理解する」必要性のために概念譬喩は必然的に存在する” と矛盾するが, 彼らの主張にはこれまで見てきたように自家撞着的な根拠しか伴っていない。

ここで, 次のように問い正してみるのは有意義だと思われる: 概念の具体性と抽象性の関係は, 本当に概念譬喩と関係があるのだろうか? 例えば, 時間は—Lakoff 派が唱えるように—抽象的で具体的な経験が伴わず, 譬喩なしには概念化できない対象なのだろうか?

そう考える必然性は, 実は理論的には存在しないし, 経験的根拠も薄弱である。例えば, 生態心理学の知見を取り入れれば, 時間は (概念譬喩を媒介とする概念化なしに) “知覚可能” だと十分に考えられる。実際, 『時間』というものを—Turvey らが巧妙な実験 [20, 25, 24] で示したように¹⁷—慣性モーメントという不変項から間接的に “知覚” されるモノの長さの認識と同じように, モノの状態変化の認識から間接的に時間が “知覚” されるものだと考えてはならない理由はある

のだろうか? Lakoff と Johnson, 並びに彼らの追従者がそうしない理由は, 彼らに想像力が不足しているから, あるいは自然科学の教養が不足しているからでないのかどうかは, 私たちにはわからない. いずれが正しい説明であるにせよ, 彼らの論法と証拠が反自然科学的な傾向のある評価者の無知につけこむのは確かである.

また「先領域(概念)の具体性が低い」と言うとき, 問題の具体性とは正確にはどういう特性のことなのだろうか? これが決まらない限り, CMT の説明は反証不能である.

以上の分析から明らかであるように, 常に「時間は資源である」という概念化は概念譬喩によって可能となるという主張の証拠は貧弱であり, 代わりに次のことが強く示唆される:

- (54) 概念譬喩写像理論は概念譬喩の認定を厳しくしないと, 無意味な説明を乱発する.

最後に, §3.1.1 で言及した一般性と例外性に関する錯覚が何に根差すかを考察し, この論文を終えることにしたい.

4.2 終わりに代えて: 限定された創造性

CMT は生成言語学と同様, ヒトの認知行動には体系性があると無条件に想定し, 過剰般化の禁を犯してまでそれを「説明」しようとする. だが, それは必然的なのか? 別の言い方をすれば, **なぜこれほど執拗に体系性の錯覚, 例外性の錯覚という形になって現われるヒトの知性や認知の関する体系性への渴望があるのだろうか?** 奇想天外な失行症の症例を見れば, ヒトの知性や認知がどれほど危うい体系性の上になりたっている分散制御されたシステムであるかすぐにわかってしまうものなのに, 実際, 体系性を無償で与えるような説明は, 妥当な認知体系の説明ではないとすら言えるのだ.

これが意味していることは次のことではないだろうか?

- (55) ヒトは様々な面で**限定された創造性** (bounded creativity) しかもたない.

Chomsky が生成文法によって強調した文法の**無限定の創造性** (unbounded creativity) が事実誤認のまやかしだったように, 譬喩の無限定の創造性も事実誤認のまやかしである. ヒトが限定された創造性しかもたないのはヒトが**限定された理性** (bounded rationality) しかもたないのと同断である. これは [3, 4] で説得力のある形で論じられている.

言語であれ認知能力であれ, ヒトの限定されない創造性は, 何につけ多くの人々が縋りたがっている神話にすぎない—限定されない理性がそうだったように.

生成言語学の悪癖を是正するために提唱された認知言語学が, なぜ「体系性の神話」を保存しようとしているのか, 私たちにはさっぱり理由が解らない. **用法基盤の言語理論** (Usage-based Theory of Language) の理念は, 少なくとも概念譬喩理論の枠組みにあつては正しく理解も実践もされていない. 用法基盤のもっとも過激な解釈では, 次のことが理解される: 「言語 (の文法) が現在の姿をしていることに (原因はあつても) 理由はない」「言語 (の文法) は語の用法の体系であり, それは**小域的な体系性をもつが, 大域的な体系性をもたない**」「文法の獲得は話者が互いに不整合な小域的な用法の下位体系の群に**慣れる**ことで達成される」.

譬喩はヒトの認知の根幹に係わる, 興味深い現象である. これは幾ら強調しても, しすぎるということはない. これを看破した点で, Lakoff 学派の仕事は重要だった. だが, 彼ら

が譬喩に与える「説明」を評価する段になると, 話は別になる. 写像がなぜ起きなければならないのか, その理由を CMT の支持者が非自家撞着的な仕方と与えることはない. CMT がそれに与える説明は, 生物が進化した理由を, それが自然選択の結果であると言っておきながら, 自然選択がどういう仕組みで成立しているかを説明しないようなものである.

Notes

¹この論文は, KLS 30 (2005/06/05 関西大学) での同名の口頭発表に基づくものである. 第一著者に対する井元秀剛氏 (大阪大学), 鍋島弘治郎氏 (関西大学) からのコメントが参考になった. 彼らの意見に対し, この論文の範囲内で全部対応できなかったことは残念である. また, この論文で取り上げられている多くの問題に関して, 黒宮公彦氏 (大阪学院大学), 中本敬子氏 (京都大学), 仲本康一郎氏 (情報通信研究機構) との議論から多くの見通しを得た. この場を借りてお礼を申し上げたい.

²説明力の過剰を問題にする点で, 本研究の結論は日本認知言語学会のワークショップ「認知意味論の展開: メタファーを巡って」(9/18/2005 お茶の水大学) での松本曜氏 (神戸大学) の講演の趣旨と一致する.

³これらの意味環境は恣意的に選ばれたわけではない. 事前調査から, x の資源性を (網羅的とは言えないまでも) うまく反映するような語彙を選んだものである.

⁴認知言語学が Lakoff [11] によって退けられた**素性表現** (feature representation) を記述に利用する必要があるという点に関しては [33] で詳しく論じた.

⁵クラス 1, 2 の区別は客観的な基準に基づくものでなく, 第一著者が直観にクラスのあいだの質の違いを感じたところ (e.g., 1.5, 1.0) としている. クラス 1 は資源として典型性の高い事例を, クラス 2 は資源として妥当な事例を表わしていることに注意. 従って, [[能力は資源である]], [[情熱は資源である]], [[チャンスは資源である]] は [[X IS A RESOURCE]] 概念譬喩と認定できる境界にある.

⁶本場に難しい場合はメトニミーとメタファーの区別が微妙になる.

⁷このモデルの根本は, 日本認知言語学会のワークショップ「認知意味論の展開: メタファーを巡って」(9/18/2005 お茶の水大学) での杉本孝司氏 (大阪外国語大学) の講演の趣旨と一致する.

⁸非常に大雑把に言うと, h は, 概念構造 F の別の概念構造 G への「適応」で, Piaget 風に言うスキーマ F の (G に対する) **調節/調整** (accommodation) である. H は Glucksberg ら [6, 7, 9] の**その場限りのカテゴリー** (ad hoc category) (を含むフレーム) であると考えられる.

⁹[21, 23] は同じ問題意識をもった先駆的な研究であるが, 上位スキーマ (化) の必要性を重要性は認識していないようである. 少なくとも上位スキーマ化をどうやって実現するかという実装の問題は彼らの念頭にはないようだ.

¹⁰私たちはスキーマという概念を [1, 2, 17, 22] スキーマ理論の伝統に沿って, 厳密な意味に使っている. 私たちの観点からすると, [15, pp. 161–169] に登場する資源スキーマは正確には資源のスキーマではない. それは活動のスキーマ化 (あるいは概念化) であり, 資源はそのスキーマの構成物である.

¹¹ h は鈴木 [30] の規定する (準) 抽象化と見なしてもよい.

¹² S_i が S_0 のプロトタイプである必要はない.

¹³これが「譬喩こそがヒトの思考の根源にあるものだ」という彼ら固有の確証バイアスによらないで起きたものだと, 私には考えにくい.

¹⁴ただし, Lakoff [12, 13, 16] が [[GENERIC IS SPECIFIC]] で論じているのは, 実際には, 図 4 の Specific (S_i) と Generic (S_0) との関係**ではなく**, ある Specific (S_i) から別の Specific の集合 ($\{S_1, S_2, \dots\}$) の関係なので, 定式化に反しているのは見かけだけの可能性もある.

¹⁵if we would like to のような, 猛烈に控え目な言い方をしているところを見ると, 師匠に逆らうのはアメリカでも大変らしい.

¹⁶手元に原典がなく, 鍋島 [32, p. 19] からの孫引きで代用する.

¹⁷[40, pp. 127–148] に, Turvey らの実験に関する平易な解説がある.

参照文献

- [1] M. A. Arbib. *The Metaphorical Brain 2: Neural Networks and Beyond*. John Wiley and Sons, New York, 1989.
- [2] M. A. Arbib, E. J. Conklin, and J. C. Hill. *From Schema Theory to Language*. Oxford University Press, New York/Oxford, 1987.
- [3] G. Gigerenzer. *Adaptive Thinking: Rationality in the Real World*. Oxford University Press, 2000.
- [4] G. Gigerenzer, P. M. Todd, and The ABC Research Group. *Simple*

- Heuristics That Make Us Smart*. Oxford University Press, 1999.
- [5] J. Gleick. *Chaos: Making a New Science*. Penguin Books, 1988. [邦訳: ジェイムズ・グリック (著) 『カオス — 新しい科学をつくる』 (新潮文庫). 大貫昌子 (翻訳).].
- [6] S. Glucksberg and B. Keysar. Understanding metaphorical comparisons: Beyond similarity. *Psychological Review*, Vol. 97, pp. 3–18, 1990.
- [7] S. Glucksberg and B. Keysar. How metaphors work. In A. Ortony, editor, *Metaphor and Thought*. Cambridge University Press, 2nd edition, 1993.
- [8] S. Glucksberg and M. S. McGlone. When love is not a journey: What metaphors mean. *Journal of Pragmatics*, Vol. 31, pp. 1541–1558, 1999.
- [9] S. Glucksberg, M. S. McGlone, and D. A. Manfredi. Property attribution in metaphor comprehension. *Journal of Memory and Language*, Vol. 36, pp. 50–67, 1997.
- [10] J. Grady. A typology of motivation for conceptual metaphor: Correlation vs. resemblance. In R. Gibbs and G. Steen, editors, *Metaphor in Cognitive Linguistics*. John Benjamins, 1999.
- [11] G. Lakoff. *Women, Fire, and Dangerous Things*. University of Chicago Press, 1987. [邦訳: 『認知意味論』 (池上 嘉彦・河上 誓作 訳). 紀伊国屋書店].
- [12] G. Lakoff. The invariance hypothesis: Is the abstract reasoning based on image schemas? *Cognitive Linguistics*, Vol. 1, No. 1, pp. 39–74, 1991. [邦訳: 不変性仮説: 抽象推論はイメージ・スキーマに基づくか? (杉本孝司訳). In 坂原 茂 (編), 『認知言語学の発展』, 1–59. 東京: ひつじ書房].
- [13] G. Lakoff. Contemporary theory of metaphor. In A. Orthony, editor, *Metaphor and Thought*, pp. 202–251. Cambridge University Press, 2nd edition, 1993.
- [14] G. Lakoff and M. Johnson. *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press, 1980. [邦訳: 『レトリックと人生』 (渡部昇一ほか 訳). 大修館].
- [15] G. Lakoff and M. Johnson. *The Philosophy in the Flesh*. Basic Books, 1999.
- [16] G. Lakoff and M. Turner. *More than Cool Reason*. Chicago: University of Chicago Press, 1989. [邦訳: 『詩と認知』 (大堀壽夫 訳). 紀伊国屋書店].
- [17] J. Mandler. *Stories, Scripts, and Scenes: Aspects of Schema Theory*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, 1984.
- [18] G. L. Murphy. On metaphoric representation. *Cognition*, Vol. 60, pp. 173–204, 1996.
- [19] G. L. Murphy. Reasons to doubt the present evidence for metaphoric representation. *Cognition*, Vol. 62, pp. 99–108, 1997.
- [20] C. C. Pagano and M. T. Turvey. Perceiving by dynamic touch the distances reachable with irregular objects. *Ecological Psychology*, Vol. 5, pp. 551–568, 1993.
- [21] P. Pauwels. Levels of metaphorization: The case of *put*. In L. Goossens, P. Pauwels, B. Rudzka-Ostyn, A.-M. Simon-Vanderbergen, and J. Vanparys, editors, *By Word of Mouth: Metaphor, Metonymy and Linguistic Action in a Cognitive Perspective*, pp. 125–158. John Benjamins, 1995.
- [22] J. Piaget. *Psychology of Intelligence*. Littlefield, Adams and Co., Totowa, NJ, 1966.
- [23] B. Rudzka-Ostyn. Metaphor, schema, invariance: The case of verbs of answering. In L. Goossens, P. Pauwels, B. Rudzka-Ostyn, A.-M. Simon-Vanderbergen, and J. Vanparys, editors, *By Word of Mouth: Metaphor, Metonymy and Linguistic Action in a Cognitive Perspective*, pp. 205–243. John Benjamins, 1995.
- [24] H. Y. Solomon and M. T. Turvey. Haptically perceiving the distance reachable with hand-held objects. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, Vol. 14, pp. 404–427, 1988.
- [25] M. T. Turvey. Dynamic touch. *American Psychologist*, Vol. 54, No. 11, pp. 1134–1152, 1996.
- [26] M. M. Waldrop. *Complexity*. Simon & Shuster, 1993. [邦訳: M. ミッチェル・ワールドロップ (著). 『複雑系 — 科学革命の震源地・サンタフェ研究所の天才たち』 (新潮文庫). 田中 三彦, 遠山 峻征 (翻訳).].
- [27] 大石亨. 共起情報を用いた概念メタファーの発見. 言語処理学会第11回大会発表論文集, pp. 392–395, 2005.
- [28] 大石亨. 水のメタファー再考: コーパスを用いた概念メタファー分析の試み. 日本認知言語学会第6回大会 Conference Handbook, pp. 113–116, 2005.
- [29] 中本敬子, 黒田航, 野澤元, 金丸敏幸, 龍岡昌弘. FOCAL/PDS 入門: フレーム指向概念分析/並列分散意味論の具体的紹介. [未発表論文: <http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/introduction-to-focal.pdf>], 2004.
- [30] 鈴木宏昭. 類推と思考. 東京: 共立出版, 1996.
- [31] 鍋島弘治郎. GENERIC IS SPECIFIC はメタファーか: 慣用句の理解モデルによる検証. 日本認知言語学会第2回大会 Conference Handbook, pp. 141–148. 日本認知言語学会 (JCLA), 2002.
- [32] 鍋島弘治郎. 領域を結ぶのは何か: メタファー理論における価値的類似性と構造的類似性. 日本認知言語学会論文集第3巻, pp. 12–22. 日本認知言語学会 (JCLA), 2003.
- [33] 黒田航. 認知 (科学的に) 妥当なカテゴリー化の (計算可能) モデルの提唱: 「放射状カテゴリー構造」と「クラスターモデル」を越えて. 日本認知言語学会論文集 Vol. 5, pp. 137–147. 日本認知言語学会 (JCLA), 2005.
- [34] 黒田航, 井佐原均. 意味フレームを用いた知識構造の言語への効果的な結びつけ. 信学技報, Vol. 104 (416), pp. 65–70, 2004. [増補改訂版: <http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/linking-1-to-k-v3.pdf>].
- [35] 黒田航, 井佐原均. 日本語の意味タグ体系を定義する試み: FrameNet の視点から. 言語処理学会第10回年次大会発表論文集, pp. 148–151. 言語処理学会, 2004. [増補改訂版: <http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/jfn-nlp10-rev4.pdf>].
- [36] 黒田航, 中本敬子, 金丸敏幸, 龍岡昌弘, 野澤元. 「意味フレーム」に基づく概念分析の射程: Berkeley FrameNet and Beyond. 日本認知言語学会第5回大会 Conference Handbook, p. 133, 2004.
- [37] 黒田航, 野澤元. COE21 ワークショップ「メタファーへの認知的アプローチ」での口頭発表の際にフロアから出た質問に対する公式回答. [<http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/metaphor-and-frames-replies.pdf>], 2004.
- [38] 黒田航, 野澤元. 比喩理解におけるフレームの知識の重要性: FrameNet との接点. [COE21 ワークショップ「メタファーへの認知的アプローチ」のための研究論文: <http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/metaphor-and-frames.pdf>], 2004.
- [39] 黒田航, 野澤元, 中本敬子. 比喩写像における“領域”は単なる副作用である: 「y が x に襲われた」に関する比喩写像の成立条件. 日本語文法学会 第5回大会発表論文集, pp. 205–214. 日本語文法学会 (SJG), 2004. [増補改訂版: <http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/domains-are-derivative-rev1.pdf>].
- [40] 三嶋博之. エコロジカル・マインド: 知性と環境をつなぐ心理学. (NHK ブックス [881]). 日本放送出版協会, 2000.